

吸入薬の名前の由来

今回は箸休め的なコラムです。気軽にお楽しみください。

吸入薬に限らず、薬には一般名(≡成分名)と販売名(≡ブランド名)があるのは医療関係者にはご存じの通り。昔は後発品(当時はゾロ薬と呼ばれていました。:先発品の特許が切れると各社からゾロゾロと発売されるから)にも販売名が認められていたので、後発品も含め薬にはその成分や効能などから開発者達が希望や期待、時にはダジャレを込めて様々な名前を付けていました。

最近では後発品は独自ブランド名を付けることが認められなくなり(一般名+剤形+規格+屋号)、先発品も商標スクワッター(※)対策として、成分や薬効から連想で出てくるような名前にせず、まったく関係ない名称プールから販売名を付けるようになってきている現状があります。初めて商標スクワッターの話をMRから聞いたのは肺癌分子標的薬のジオトリフだったように記憶しており、当初外資系製薬会社の新薬がそういった対策されていましたが、最近は国内製薬会社でも名称の由来なしの新薬が出てきていますね。昔から新薬が出るとインタビューフォームの名前の由来を見るのが楽しみだった者としては残念なことです。

※ 転売目的で企業の著名商標などを先に申請登録し、保有する者。新薬が発表されると販売名として連想できそうな名称を商標スクワッターが予め商標登録しておき、製薬企業が同じ名称で新薬の商標を登録しようとしたときに商標権を主張し、高額な商標権移管料を要求する。法律を悪用した厄介勢。

さておき。吸入薬には販売名その他、デバイスにもブランド名が付いているのが特徴的です。近年の吸入薬について、インタビューフォームを確認してみました。

タービューヘイラー(Turbuhaler)系

デバイス(Turbuhaler)：マウスピース内で作り出される Turbulence (乱気流)の Turbu と Inhaler の haler から Turbuhaler とした。

パルミコート(Pulmicort) 2002年

：Pulmonary(肺)から Pulm を、Corticosteroid から cort を引用し、Pulmicort とした。



シムビコート(Symbicort) 2010年

：Symbiosis (共生、共存) + Cortisol (副腎皮質ホルモン) から名付けられた。

コメント：タービューヘイラー部分は、微粒化機構の特徴から想像しやすいですね。パルミコートとシムビコートでは、コート部分がほぼ同じ意味ですが微妙に違う単語に由来しているのが不思議。担当者が異なったりして言葉の揺らぎですかね。

ブリーズヘラー系

デバイス：記載なし

オンブレス(Onbrez) 2011年

：1日1回投与を意味する「once daily」と、やさしい空気の流れである「そよ風」を意味する「breeze」を組み合わせ「Onbrez (オンブレス)」と命名した。



シーブリ(Seebri) 2012年

：「海」を意味する「Sea」、「そよ風」を意味する「breeze」を組み合わせ「Seebri (シーブリ)」と命名した。

ウルティブロ(Ultibro) 2013年

：「究極」を意味する「Ultimate」、「気管支拡張薬」を意味する「Bronchodilator」を組み合わせ「Ultibro (ウルティブロ)」と命名した。

エナジア(Enerzair) 2020年

：energy と air を組み合わせ、Enerzair(エナジア)とした。

アテキュラ(Atectura) 2020年

：architect や architecture を由来として、Atectura (アテキュラ) とした。

コメント：初めてオンブレスの名前を聞いたとき、「COPD の薬だから、使うことで歩けなかったおじいちゃんが歩けるようになる、これまでおぶってやっていたのがおんぶしなくてすむ。オンブ+レスか！」とか独り合点して盛り上がっていましたが、まあ外資系でそんな日本語のダジャレ命名はないですね。

登場時期に応じて名付けの傾向があって、初期のオンブレス、シーブりは風のイメージ。ウルティブロは究極の気管支拡張薬と大きく出ましたね。そしてエナジア、アテキュラはあまり深い意味を持たせなくなったのは商標対策でしょうか。

なお、デバイス名称の由来はいずれの IF にも記載ありませんでした。まあ初期の吸入薬と同じ、breeze(そよ風)に吸入器(Inhaler)のhalerからの名称だと容易に想像できますが。比較的弱い吸入力(そよ風)でも吸える特徴が連想できます。

レスピマット系

デバイス(Respimat)：記載なし。レスピは、呼吸器領域の薬 (respiratory medicine) を意味する「respi」、マットは、製品の機械的機能に関係するオートマチック (automatic) の「mat」に由来(MR 情報)。

スピリーバ(Spiriva) 2010 年 ※旧デバイスの吸入用カプセルは 2004 年

：“バイタリティ、エネルギー、インスピレーション”を想起させるスピリット (Spirit) に由来している。また、「Spiriva」の「Spir」は、呼吸機能検査を意味するスパイロメトリー (Spirometry) を連想させ、呼吸機能にも関連づけている。

スピオルト(Spiolto) 2015 年

：本剤は、チオトロピウム臭化物及びオロ立テロール塩酸塩を有効成分とする配合剤である。

「Spi」は、チオトロピウムが既に製品名「Spiriva」として上市されていることを踏まえ、“バイタリティ、エネルギー、インスピレーション”を想起させるスピリット (Spirit) に由来している。

続く「ol」は、もう一つの有効成分であるオロダテロールの INN 名(一般名)「olodaterol」に由来している。末尾の「to」は together に由来している。

コメント：スピリーバは COPD 患者にバイタリティやエネルギーを与える、という正当派(?)な薬剤名に期待を込めた名称ですね。COPD の治療方針を変えた強さがあります。そしてスピオルトは知名度のある先行製品との関連性が分かる名称。オーダリング上で入力ミスを起こしやすいのが玉に瑕ではありますが。

デバイス名称は記載なしですが respiratory(呼吸器)が連想できますね。

エリプタ(Ellipta)系

デバイス(Ellipta)：楕円形 (ellipse)

レルベア(Relvar) 2013年：該当資料なし

アノーロ(Anoro) 2014年：該当資料なし

エンクエラッセ(Encruse) 2015年：該当資料なし

アニュイティ(Arnuity) 2017年：該当資料なし

テリルジー(Trelegy) 2019年：該当資料なし

コメント：吸入薬最大のバリエーションがあるエリプタ系ですが、名称についてはデバイス以外は由来なしとさみしい結果でした。

フルティフォーム(Flutiform) 2013年：Fluticasone (フルチカゾン) + Formoterol (ホルモテロール) から命名

コメント：今回挙げているデバイスのなかでは珍しく、分かりやすい成分名を由来とする名称です。配合剤であり、構成成分が一発で分かる薬剤師的にはありがたい名前です。ちょっと入力しづらくて、発売当初はローマ字での入力キーを書いたリーフレットも配っていましたね。

なお、デバイス名は「エアゾール」。フルプッシュを併用することでpMDIとしては大きく操作性を改良した、pMDI デバイスの世代が変わったところなので、デバイスも何か付けてもよかったです。

エアロスフィア(Aerosphere)系

デバイス(Aerosphere)：薬剤結晶と比べて比重の軽い担体がキャリアとなって薬剤を送達させる技術を用いたことから、空気のように軽い「Aero」と担体の「sphere」をとって「Aerosphere」と名付けられた。

ビレーズトリ(Breztri) 2019年：「Breeze (そよ風)」と「Breathe (呼吸)」の「Brez」と3薬効成分による治療であることから「triple」の「tri」をとって「Breztri」と名付けられた。

ビベスピ(Bevespi) 2019年：優れた2剤配合剤で呼吸を届けるという狙いから、「Bi」（2剤配合剤）、「Best」（一番の）、「spi」（respire：呼吸するの意）を合わせて「Bevespi」と名付けられた。

コメント：2剤とも「ビ」が付いているので関連があるかと思っていましたが、調べてみるとそれぞれ由来が異なりますね。ビレーズトリのトリが3剤療法を意味するのは想像していましたが、ビベスピのビが2剤を意味するのは調べるまで想像していませんでした。

エアロスフィアはなんとなく想像はできていましたが、担体に薬剤が付いていて、気流で分離するイメージからですね。最近ビレーズトリはデバイスが変更されましたが、名称の由来である担体は変わらないので、名称変更されないのも納得です。

今回は近年処方されている薬剤について調べてみました。機会があれば過去に遡って薬剤の由来も書いてみたいと思います。前書きで述べたように、多分古い薬剤の方が面白い由来持っている可能性があると思います。

（文 埼玉県立循環器・呼吸器病センター 薬剤部 杉田英章）

